

【論点整理】

<はじめに>

- 1 全国の状況
 - 全国的には、今後船員不足が見込まれる
 - 食糧問題を考えるときに、農林水産業について考えることは重要

- 2 島根の水産業について
 - 隠岐の場合、特に産業に占める水産業の割合が高い
 - 隠岐の観光振興にも水産業の支えが必要
 - 漁業従事者の減少、高齢化が課題
 - 外国人労働者が増加傾向

- 3 島根の水産業（企業）への要望
 - 高校と一緒に次代の担い手を育成する
 - 魅力ある水産業づくり
 - 若者の県内定住のためには、労働条件の整備が必要

<水産高校（本科）のあり方について>

- 1 水産高校の存在意義（必要性）
 - ・卒業生が地元産業の担い手
 - ・県内に就職…高い資格をもった高校生が地元産業へ就職
 - ・他県への就職…いったん県外に出てもUターン
 - ・資格を取り全国的に不足している船員への就職

- 2 水産高校の現状
 - ①全体
 - 入学者の少なさ
 - 資格取得など水産高校の良さがあまり外に伝わっていない

 - ②海洋系学科
 - 資格取得の成績の良さ
 - 海洋系は、生徒が目的意識を持ちやすい

 - ③食品系学科
 - 地域産業担い手育成事業の取り組み内容には興味がある
 - 食品系は幅が広いため多様なニーズの受け皿になっている
 - 就職希望者のうち85%が水産系以外の職種を希望

3 提言

- ①学科のあり方…海洋系学科は現行まま
食品系学科を2校でそれぞれ特色を出す
(現在も、浜田水産は流通、隠岐水産は栽培も)

- ②制度の見直し…学校から提案のあった制度の検討
【くくり募集】【一部科目の選択可能に】
【海洋系学科の教育課程の複線化】
※今後の検討が必要…授業のコマ数、教員数
ティームティーチングで地元人材を外部講師として活用

- ③教育内容について
 - ・カリキュラムの検討…企業・地域との連携（企業ニーズに適合）
 - ・水産の食品系に関連した内容で生徒たちのニーズにあったものを探す
 - ・水産加工だけでなく、食品加工一般の学習も
 - ・食品系のもっと高度な教育（冷凍技術、魚のバイオ研究）
 - ・浜田の水産技術センターや隠岐の種苗センターとの連携
 - ・新たな科目の導入すべき
 - ・ 出口を意識したもの
 - ・ 学校設定科目の導入…教科書、新たな教育機器も必要
長期的な視点で必要性を見極めること
 - ・キャリア教育の充実…「社会人基礎力」の養成

- ④P Rの工夫
 - ・ 地域、社会に対して発信していくことが大切
 - ・ 子どもの頃から海に関する学習の機会を設ける
 - ・ H Pの充実
 - ・ 卒業生が地元の船で働く様子などを映像化

- ⑤水産高校の活用…企業と連携して、社員の研修の場にする

- ⑥他県から意欲のある生徒を島根の水産高校へ…他県へのP R

- ⑦地域社会との連携
地域が必要とする学校を、地域が支える

<専攻科のあり方について>

1 専攻科の存在意義（必要性）

資格を取り全国的に不足している船員への就職
水産高校の教員の養成

2 専攻科の現状

- 高い就職率
- 本科生の人気のある進学先
- 資格試験で優れた成績
- 専攻科の存在が、他県へのアピールする力になる
- 専攻科の卒業生は県外に就職しているが、全国的な視点で考えるべき
- 毎年専攻科の定員（両校で20名）が充足しているわけではない
- 専攻科生のほとんどは、県外に就職
- 専攻科についてはまだ十分認知されていない
- 専攻科を持つことでコストがかなりかかっている

3 提言

- ①専攻科は現行の体制でよい
- ②専攻科の必要性をきちんと述べる
- ③積極的な情報発信

<水産練習船のあり方について>

1 水産練習船の存在意義（必要性）

- ・資格取得のため…3級海技士免許、1級小型船舶操縦士免許等
- ・漁業実習、航海実習

2 提言

1案 1隻体制 大型船 650トンの新船建造

2案 2隻体制 中型船と大型船 199トンの新船建造

理由

<おわりに>

○ 「水産高校を地域の宝に！」

- ・ 地域社会との連携… 「地域が必要とする学校を、地域が支える」
 - ・ 地域の企業のニーズにあった社会人を養成
 - ・ 地域の公共施設（水産技術センター、種苗センター）と連携
 - ・ 地域の企業、船でインターンシップ
 - ・ 地域の人材を外部講師に

○ 行政への要望

- ・ 県の水産行政の中で、水産高校を県の水産業を支える重要な人材育成機関であると位置づけ、そのあり方について検討すべきである。
- ・ 多くの人材を養成している水産高校を、重要な人材育成機関として位置づけるよう県が国に対して要望すべきである。